

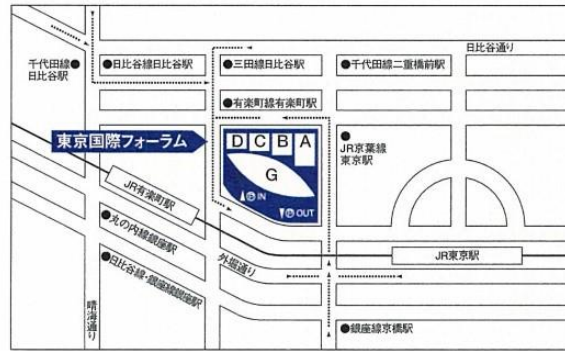
「ボッシュとの会話」より“愛するとは食べる” 1996～1997

その素晴らしいイマジネーションの輝きを、再び私のもとへ運んで来てくれたのである。

「快樂の園」の模写作品によって、瀧・梅岡真理子は、芸術世界にこのうえない贈り物と教訓をもたらしてくれた。この見事な絵は世界中で鑑賞することができるため、本物の絵がピカソの大作「ゲルニカ」が受けたような、ほとんど破滅的な損傷を受けなくてすむことになる。このように大きな絵は、現在展示されている場所から動かすべきではないと思う。ボッシュの絵のレプリカがたった今誕生した。この絵は、古くならないうちにどこへでも旅することができる。

瀧・梅岡真理子の風景の持つ謎めいた雰囲気は、疑いもなく彼女が理想とするこの巨匠の精神を不思議にも受け継いだことによるものにちがいない。また、二人の大胆さがお互いを結びつけてもいる。「夜の竹里」と題された作品は、「快樂の園」に描かれたあらゆる光景を、中に閉じ込めたり開いて見せることのできるようにした画板の上の半円の中にボッシュが描いたものと関連を持っている。このことは、瀧・梅岡真理子の模写作品を、単なる模写以上の驚嘆すべき透明な鏡としているのである。

E. グラネル



- 会期** 2000年12月1日(金)～11日(月)
開催期間中無休
10:00～20:00(初日17:00まで、最終日17:00まで)
- 会場** 東京国際フォーラム(東京都千代田区丸の内3-5-1)
Aギャラリー(Aブロック1階、中庭プラザに面し交流プラザに隣接)
Eギャラリー(Eブロック地下1階、外国人観光案内所前)
- 主催** 実行委員会(事務局 03-3479-2001)
- 後援** スペイン大使館
- 交通のご案内**
- JR線** 東京駅より徒歩5分(京葉線東京駅と地下1階コンコースにて連絡)
- 地下鉄** 有楽町駅より徒歩1分
有楽町線 有楽町駅と地下1階コンコースにて連絡
日比谷線 銀座駅より徒歩5分/日比谷駅より徒歩9分
千代田線 二重橋前駅より徒歩5分/日比谷駅より徒歩9分
丸の内線 銀座駅より徒歩5分/京橋駅より徒歩5分
銀座線 銀座駅より徒歩5分
三田線 日比谷駅より徒歩7分



「黒い森」1997

Mariko Umeoka Taki

瀧・梅岡真理子

ボッシュとの出会いと会話

ENCOUNTER AND CONVERSATIONS WITH BOSCH
ENCUENTRO Y CONVERSACIÓN CON EL BOSCO



「快樂の園」部分 “アダムとイヴ” 1989～1994

瀧・梅岡真理子の「ボッシュ礼賛」

画家にしる彫刻家にしる、芸術家は生涯に一度か二度、神がかりのような精神状態に陥って、天与の一作というべき作品を創造することがある。ゴヤの「1808年5月3日」(1814年)、あるいはアントニオ・サウラの「ゴヤの犬」(1984年)はその代表例であろう。ここで紹介する瀧・梅岡真理子の「ボッシュ礼賛」もまたその好例だといってよい。ボッシュの「快樂の園」が、宝石を散りばめえたような鮮やかなく陽の天国と地獄を示すとすれば、梅岡の「ボッシュ礼賛」は、モノクロームのく陰の天国と地獄である。テンペラと油絵の混合技法によるグレー一色の「ボッシュ礼賛」(1997年)は、不思議な透明感を見せる静謐な作品だといってよい。主題、モチーフ、色彩、タッチ、加えて、日本東洋の絵画や書など、過去の芸術作品の伝統を画中に織り込みながら、梅岡はいともあっさり画面を仕上げた。すでに五年間にもわたる「快樂の園」の模写の作業を乗り越えて、この地獄の画像は、梅岡にとって自家薬籠中のものとなっていたに違いない。複雑な濃淡を見せる灰色の諸形態は、日本の琳派や文人画のくにじみやくたらしこみ、あるいはく外隅の繊細な技法を想起させる。梅岡は、確かにボッシュの作品の秘密を理解したのだ。画面のあちこちに記された書の文字は、灰色の形象と重なり合っ、静かに、そして不気味な叫び声をあげている。く爽やかな気味悪さく、「ボッシュ礼賛」を一言でいえば、こういうことなる。

中谷 伸生

関西大学文学部教授・美術史家

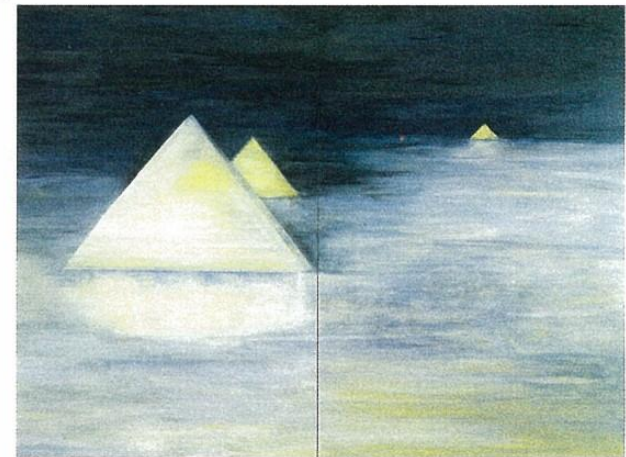
時間の詩

ブラド美術館にあるボッシュの絵の、瀧・梅岡真理子による巨大な模写作品の快樂の園は、最初、信じ難いものを見ているという驚きの念を起こさせる。時間に追われ、一瞬の感情に左右されて動く現代社会にあって、昔の絵の師匠(マエストロ)、それも、きちょうめんで精密で、細部にまで気を配り完璧家であった中世のフランドルのマエストロが持っていたような名人芸、辛抱強さ、根気を持つ者がいるなどと信じるのできないのである。この大変に若く並外れた日本人画家の、偉大なるトリプティカの色調の輝きは、今、何世紀も時の経過を容赦なく見せているボッシュの絵が、もともとはどのようなものであったのかということに夢みさせてくれ、我々の目には、何百年を経た後でさえほとんど変質することなく、今日まで、もとのすばらしい色調を保ち続けているような古文書の、驚くべき華麗な細密写本のようにうつる。あらゆる場面で、ボッシュのファンタジックなイマジネーションが、驚異的なほど忠実に再現されており、既に知っているにもかかわらず魅了されてしまう世界に、我々を沈み込ませてしまう。

これほどに並外れた創作を前にしても、ボッシュの名作中の名作としてあまりにもよく知られている画像であるため、見ていると、ボッシュの絵に思いをはせてしまうのだが、また、この日本人画家が、この作品に、辛抱強く長い時間を費やしたことであろうとか、描き上げるのに深い集中力を要したことであろうとか、すでに失われてしまった過去の世界や、現実と芸術に対する異なった理解のしかた、東洋と西洋の相違点と類似点などについても考えをめぐらせる。この作品は深い思いを誘うものでありながらはつらつとして快活であり、深遠でありながら表層的でもある。



「夜の竹里」1996



「砂の森」1996

威嚇的でありながら遊びの精神もある。思わず、日本芸術の持つ驚くほどのシンプルさに思いをはせるのである。

マヌエラ・メナ

(元国立ブラド美術館館長、現パトロナート)

ヘロニモ・ボッシュの透明な鏡

日本人画家瀧・梅岡真理子は、ブラド美術館に於いて、かの創意にあふれた大人物ヘロニモ・ボッシュが夢想した究極の謎の世界である「快樂の園」と呼ばれるトリプティカを模写(この上なく見事に)するという、大胆で根気強い仕事をやり遂げた。

この若い女性画家は、彼女の書いた「ボッシュとの出会い」という文章の中で、スペインへ何度もやって来た時の状況や、ベラスケス、スルバラン、ゴヤの絵に対して抱いた興味、ボッシュの時代に使われていた絵の具を使いこなすという、非常に困難な作業をやるようになるまでの訓練過程や、ボッシュの巨大な画面の再現に専念した5年間というもの、毎日ブラド美術館でどのような方法で描いたかということ述べている。

マドリードのシルクロ・デ・ベジャス・アルテスに於ける絵画展の初日にその「快樂の園」の模写作品を見た時、私はそのあまりにも正確に写された透明な鏡を前にして驚くと同時に、このフランドルの画家の作品に関するあることを思い出していた。

瀧・梅岡真理子の才能は、その根気強さとあいまって、再びその期待を呼び起こすこととなった。彼女のおかげで、ボッシュは